

[成果情報名] ナシを加害するチュウゴクナシキジラミの発生消長と有効薬剤の確認

[要約] ナシを加害するチュウゴクナシキジラミに対して、黄色粘着トラップにより発生ピークを確認し、防除適期に有効薬剤を散布することで発生密度を低く推移させることができる。

[キーワード] ナシ、侵入害虫、チュウゴクナシキジラミ、すす病、落葉

[担当] 農業技術部、資源循環研究室、病虫害管理グループ

[代表連絡先] 電話 083-927-0211

[研究所名] 山口県農林総合技術センター

[分類] 普及成果情報

[背景・ねらい]

ナシの害虫であるチュウゴクナシキジラミが 2012 年に山口県で確認され、落葉、すす病などの被害が確認されている。本種は新規侵入害虫であるため、効果的な薬剤が少なく、防除対策の確立が急務となっている。そこで、発生消長と有効な薬剤を確認する。

[成果の内容・特徴]

1. 本害虫に有効な薬剤は、スピネトラム水和剤（ディアナ WDG）、クロチアニジン水溶剤（ダントツ水溶剤）、ニテンピラム水溶剤（ベストガード水溶剤）に加え、チアメトキサム水溶剤（アクタラ顆粒水溶剤）、イミダクロプリド水和剤（アドマイヤー水和剤）の防除効果は高い（図 1）。
2. チュウゴクナシキジラミの発生消長は、黄色粘着トラップにより確認できる。本害虫の越冬成虫は、1 月下旬から活動を開始し、第 1 世代以降、世代を繰り返し 6～8 月に発生が多くなる（図 2）。
3. 黄色粘着トラップの誘殺ピークと有効積算温度などから、防除適期は春先の幼虫発生期（4 月下旬～5 月中旬）および夏場の発生増加初期（6 月下旬～7 月上旬）であると推測される（図 3）。従来の防除体系における 4 月下旬、7 月上旬の防除を、それぞれ本害虫に有効な薬剤に変更することで密度を低く抑えることができる（表）。

[普及のための参考情報]

1. 普及対象：日本なし生産者
2. 普及予定地域、普及予定面積：山口県、日本なし面積 約 120ha
3. その他：発生の有無は、黄色粘着トラップで確認できる。

トルフェンピラド水和剤（ハチハチフロアブル）はチュウゴクナシキジラミに対して効果が高いが、登録はナシのアブラムシ類のみ。

感受性低下を避けるため連用を避け、系統の異なる薬剤のローテーション散布に努める。

[具体的データ]

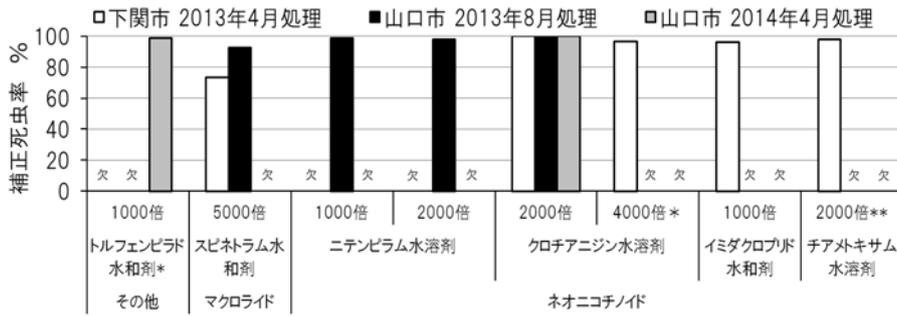


図1 チュウゴクナシキジラミの成幼虫に対する各種薬剤の7日後の殺虫効果 (圃場試験)
 注) 数字は処理7日後の補正死虫率(%). 背負式電動噴霧器を用いて散布量400L/10a相当量を散布した。処理は各薬剤区とも15㎡/区、3反復とした。
 *の付いた剤はアブラムシ類に登録あり。**の付いた剤はシンクイムシに登録あり、チュウゴクナシキジラミには3,000倍の登録あり。印のない薬剤はチュウゴクナシキジラミに登録あり。

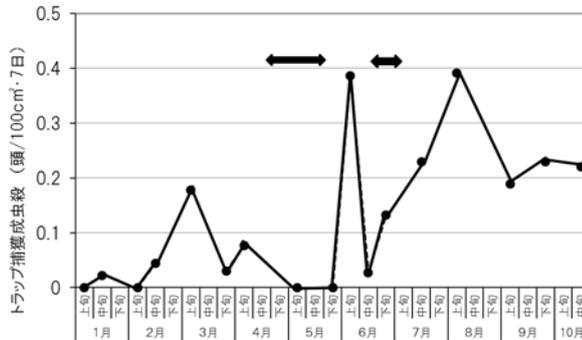


図2 チュウゴクナシキジラミの発生消長 (2013年・下関市)
 注) 2013年4月下旬にアクタラ顆粒水溶剤、7月上旬にダントツ水溶剤を散布。
 図中の ◀▶ は有効積算温度などから算出した防除適期を示す。

成虫起点日	4月						5月					
	1	6	11	16	21	26	1	6	11	16	21	26
3月11日	-	-	-	-	-	-	o	o	@	@	@	@
6月						7月						
	1	6	11	16	21	26	1	6	11	16	21	26
	A	A	A	-	-	-	o	o	o	o	o	o

図3 防除適期予測
 注)-は卵、○は幼虫、@は幼虫最盛期、Aは成虫(産卵前期間)、■は防除適期を示す。

表 チュウゴクナシキジラミに対して有効薬剤を導入する前後の発生状況(8月調査)

場所	有効薬剤導入前		有効薬剤導入後	
	すす病葉率%	寄生葉率%	すす病葉率%	寄生葉率%
下関市	75.4	75.4	1.0	1.0
阿武町	-	14.0	4.0	4.0
山口市	64.0	70.0	5.0	11.0

注)下関市、阿武町での初確認は2012年で、山口市での初確認は2013年である。それぞれ翌年より4月下旬にアクタラ顆粒水溶剤、7月上旬にダントツ水溶剤を散布した。-は欠測。

(出穂美和)

[その他]

研究課題名：新規侵入害虫チュウゴクナシキジラミの防除技術の確立
 予算区分：その他外部資金 (全農委託)
 研究期間：2013～2014 年度
 研究担当者：出穂美和、岩本哲弥、本田善之、河村俊和、殿河内寿子